

大学進学動機と学部の独自性との関連： 文医融合学部に所属する大学生に着目して

浦上 萌^{1),3)}・奥野 真由²⁾・行實 鉄平²⁾・野田 耕²⁾・
秦 佳江¹⁾・大橋 充典²⁾

本研究は、学部の独自性が大学進学動機の中にどのように含まれるのか検討することが目的であった。久留米大学人間健康学部所属する1年生140名を対象に、先行研究で使用されてきた大学進学動機尺度に大学の独自性に関わる項目を加えて質問紙調査を実施した。因子分析の結果、「内的期待」「外的期待」「資格・専門性」「無目的」が抽出され、大学の独自性の項目は「内的期待」に含まれた。また、クラスター分析を行った結果、資格を取得する目的があり、興味のある専門的知識について学びたいといった目的がある者もいれば、目標が未決定で明確な大学進学動機がない学生がいることも分かった。本研究を通じて、大学の示す独自性と自分自身の大学進学動機とが合致する学生がいることが明らかになり、明確な大学進学動機がない学生については、大学生活の中でどのように目的意識が変化していくのか追跡調査する必要があることも示唆された。

キーワード：進学動機尺度、内的期待、資格取得、キャリア発達、大学1年生

The relationship between students' motivations for enrolling at university and the originality of faculty: A focus on integrated medical and humanities disciplines

Moe URAGAMI, Mayu OKUNO, Teppei YUKIZANE, Koh NODA,
Kae HATA, and Mitsunori OHHASHI

The present study examined how the originality of faculty was among the motivations for students' enrollment at university. University freshmen studying at the Department of Human Health at Kurume University ($N = 140$) completed questionnaires on the originality of the faculty. As a result of factor analysis, "internal expectation," "external expectation," "qualification / expertness," and "non-purpose" were extracted. The item "originality of faculty" was included in internal expectation. In addition, cluster analysis indicated that some students were motivated to acquire qualifications and gain professional knowledge and skills while others had a definite goal to go to study further. Through this research, it became clear that some students are attracted to the originality indicated by the university along with their other motivations. We also investigated the case of college students who did not have a definite motivation during their first year.

Keywords: internal expectation, qualification / expertness, career development, university freshmen

1) 久留米大学人間健康学部総合子ども学科
2) 久留米大学人間健康学部スポーツ医科学科
3) 現職) 椋山女学園大学人間関係学部心理学科

問題と目的

少子化現象が進むなか、わが国の高等学校卒業者の大学進学率は49.6%となり（文部科学省，2017），1948年からの調査以降，過去最高となっている。この大学全入時代を背景に，各大学は学部の新設・改組やカリキュラム改革等を行うとともに，どのような学生にどのような教育を行い，どのような人材を育てていくのかを明示し，大学間で差別化を図っていくことが喫緊の課題といえる。

2017年度に開設された久留米大学人間健康学部は総合子ども学科とスポーツ医科学科から成り，「文医融合」により文系学部でありながら医学も含んだ幅広い知識と技術が学べる新しい学部である。また本学部は，両学科の特色ある授業を相互に学べるカリキュラムを設定していることから，幼児教育・保育学や子どもの発達に関わる事柄と，身体の発育発達や運動機能についての知識や技能を兼ね備えた専門性を育む機会が期待されるが，実際に入学した学生がこのような特色に魅力を感じているのか，また，どのようなことを学習したいと考えているのかどうかは明らかになっていない。そこで本研究では，大学に進学してきた目的の中に大学が示す独自性がどのように関わってくるのかを検討する。

何を目的として大学に進学するのか，あるいは進学してきたのかを大学進学動機（古市，1993）という^{注1}。大学進学動機は，学業に対する向き合い方や大学生としての成長，大学生活の充実度等にも関連していることが分かっている。具体的には，大学で実際に学んでいく学業の内容との間で学生が感じるリアリティショックとの関係や（半澤，2013），初年次の大学へのコミットメントとの関連が大きいことが分かっている（松田ほか，2014）。さらに，初年次の大学進学動機が大学への愛着を媒介して大学への適応に関連していることも示されてきた（中村・薊，2016）。また，専門知識や技術を学びたいというような専門性に関わる大学進学動機は，学業意欲や授業意欲と関連があることや（後藤，2003），専門知識や教養を身に付けたいというような大学進学動機が高い学生は学業成績が高いといった結果もあり（測上，1984），大学進学動機の内容により，その後の大学生生活の学習態度や適応にも関わってくるものが明らかになっている。

大学進学動機については，これまでにも多くの研究が進められてきているが，その因子は対象の学校種別や学部学科の専門性により異なることが多い。例えば，測上（1984）は高校3年生を対象に，大学進学動機についての項目を作成している。その結果5つの因子が採用され，「大学の本来の機能」「家族への配慮と規範機能」「モラトリアム機能」「大学の副次的機能」「大学の経済価値機能」が採用されている。その後，八木ほか（2000）や栗山ほか（2001）の研究においても高校3年生を対象に大学進学動機に対する調査が行われているが，測上（1984）の因子を完全に再現したものはなく，対象者の学業レベルや地域によって少しずつ内容が変わったことが示された。具体的には，「大学の経済価値機能」となっていたものが裕福さのみに関わる項目だけでなく，大卒という肩書きがほしいなどの「社会的地位」に関する側面も含む因子に拡張し，資格を取るためといった「資格・専門」の因子が増え，親孝行のためといった「家族への配慮と規範」の因子が特に目的はないといった「無目的・漠然」の因子に統合されている。

さらに大学生を対象とした研究についても多く存在する。例えば古市（1993）は，測上（1984）の尺度を参考にして25項目の質問紙を実施した結果4因子を抽出し，特に目的はなく，周囲の者の勧めなどにより進学する「無目的・同調」，遊びたいから，交友関係を広げたいからといった「享楽思考」，専門的な知識・技能の習得や，教養を高めることを目的として進学する「勉学志向」，資格の

取得や有利な就職を目的として進学する「資格・就職志向」を採用している。その後、中村・薊(2016)が57項目を使用した調査では10因子が抽出され、自分の学力を考慮したといった「偏差値との適合」の因子や、これまでは「社会的地位」とひとくくりにとまとめられていた因子が「知名度・評判」「世間体・同調」といった詳細な因子として抽出されている。また、保育士養成課程に在籍する大学生・短期大学生を対象にした25項目からなる調査(松田ほか, 2014)では、「無目的・漠然」「社会的地位」といった他の先行研究と同様の因子に加え、自分の才能を伸ばすためといった「自己形成」と親孝行のためという「親」を含む4つの因子が抽出された。

以上のように、対象学年や専攻により多少の違いはあるが、「大学の本来の機能」や「勉学志向」「資格・専門」といった個人の興味関心を深めることに関わる因子、「大学の経済価値機能」「社会的地位」といった大学入学によって副次的に得ることができると考えられている社会経済的地位に関わる因子、そして特に明確な目的がないという「無目的・漠然」といったようなモラトリアムにも関連する因子が存在することは大学進学動機の特徴であると考えられる。

そして大学進学動機はその特徴を明らかにすることだけに留まらず、その後の大学生活の中で、興味関心やキャリアに対する考え方がどのように変化していくかとの関連について着目することも意義がある。キャリア発達の視点に立つと、大学生時代の発達課題は、高校卒業時に考えられる大学進学動機に関わる発達の課題の達成を土台とし、選択した専門領域の中でできる新たな初体験の価値付けや意味付けを累積するための行動と態度を発達させると考えられている(渡辺, 2009)。よって、大学生は進学した大学のカリキュラムの中で、大学側が示した特色を含んだ授業を受けてその内容を理解し、自分自身の大学卒業後の進路を学生生活の中で模索していかなければならない。

本研究では、先行研究の大学進学動機の特徴と比較しながら本学への大学進学動機と期待の特徴を明らかにするとともに、どのように動機が変化していくのか4年間の追跡調査を行う。なお本年度は、1年次前期終了時点における大学進学動機に関する分析を行い、特に大学側が示した大学の独自性がどのように潜在意識の中に反映されているのかを明らかにする。さらに大学進学動機に基づく学生の特徴についても示す。

方 法

調査対象者

久留米大学人間健康学部1年生140名(総合子ども学科54名:男子16名,女子38名),スポーツ医科学科86名:男子55名,女子31名)である。総合子ども学科では、保育・幼児教育をはじめ、医学・心理学・社会学・福祉学等の幅広い専門領域から総合的に「子ども」を学ぶことができる特徴がある。また幼稚園教諭一種免許や保育士資格が取得できる。スポーツ医科学科では、人間の発達段階に沿ったからだの仕組みを体系的に学び、ライフステージ全体にわたる医学的・科学的な専門知識、スポーツ・運動における支援の技術を学ぶことができる特徴がある。また中学校・高等学校教諭一種免許状(保健体育)やアスレティックトレーナー受験資格等も得られる。よって、両学科とも資格取得を目指し入学している学生が多いという特徴のある学科である。

調査内容

本学への大学進学動機を明らかにするために、大学進学動機尺度を作成する。「進路決定方略」(栗

山ほか, 2001) や「進学動機」(松田ほか, 2014), 「大学への入学動機」(中村・薊, 2016) に関する調査において開発された調査項目を参考に, 本学部入学者にあわせた大学進学動機も加え, 33項目を作成した。自分の興味関心や教養を身に付けることを指向する「得意分野・自己形成」, 特に目的や動機がない「無目的」, 学歴等が含まれる「社会的地位」, 就職したい職業に関係する資格免許や専門性に関わる「資格・専門」, 自分自身の学力に関わる「偏差値との適合」, そしてこれらに加え, 本学部の特徴である医学部との連携や地域に根差した教育に魅力を感じているというような「本学の独自性」に関する項目を含んだ。各項目は, リッカート型5段階尺度のインディケータにより測定し(全くそう思わない-とてもそう思う), その結果は間隔尺度を構成するものと仮定した上で得点化を施し, 平均点を算出することで各種分析を進めた。

調査手続

2017年7月に講義の冒頭で無記名方式により一斉に実施した。質問紙回答前に, 著者より調査の趣旨, プライバシーの保護とデータの保管方法, 自由参加で不利益防止の配慮等に関する倫理的配慮の説明を行った。その結果, 135名の回答が得られたが, いずれの質問項目についても同一の数字のみに回答する等の不備がある回答を除外した結果, 127名(総合子ども学科49名:男子14名, 女子35名, スポーツ医科学科78名:男子49名, 女子29名)の回答が得られた。

また今後継続的に調査を行う予定であるため, 各時点のデータをマッチングするために携帯電話の下4桁の番号を記述してもらうよう指示し, これにより個人が特定されることはないことを説明したうえで承諾を得られた学生に回答してもらった。なお, 本研究は久留米大学御井学舎倫理委員会による審査を受け, 承認を得た上で実施されている。

結果

大学進学動機尺度の因子構造及び信頼性の確認

初めに, 大学進学動機の因子分析を行った結果, 栗山ほか(2001)や松田ほか(2014), 中村・薊(2016)の因子構造は再現されなかった。これを踏まえ, スクリーンプロットを参照し, 3因子と4因子が適当と考え, 因子数を3因子と4因子に指定してプロマックス回転法による因子の回転を行った。両者とも, 負荷量が.45以下の項目および複数の因子に高い因子負荷量を持つ項目を除外したものを最終的な因子パターンとし, 因子の解釈と信頼性係数を比較した結果, 4因子解24項目を採用した。信頼性係数を算出したところ, $\alpha = .76 - .90$ であり, 一定の信頼性を備えていると判断し, 以降の分析ではこの24項目を使用することとした(Table 1)。

第1因子は, 「人生の視野を広げるため」「大学の設備が充実していたため」「幅広い教養を身につけるため」という学業に対する学生自身の内的動機が関わり, 大学が学生に対して本来期待している項目が含まれているため「内的期待」と命名した。第2因子は, 「高卒では嫌だから」「大卒の肩書がほしいため」「高い社会的地位を得るため」という大学に進学し, 卒業することで得る副次的な利益に対する学生の外的動機が関わり, 地位や収入に対する項目が含まれているため「外的期待」と命名した。第3因子は, 専門的な知識や技術を身につけるため」「興味のある分野を深く掘り下げるため」という, 取得したい資格や専門的知識, 技能に関わる項目がまとまっていた「資格・専門性」と命名した。第4因子は, 「自分の成績にあっていたため」「自分の学力を考慮したため」とい

う何か目的を持って大学に入学してきたわけではないという項目がまとまっていたため「無目的・漠然」と命名した。

なお、本研究で加えた大学の独自性に関する項目（例「地域に根差した教育方針に魅力を感じたため」「文系と医系の連携である「文医融合」の学部に魅力を感じたため」等）に関しては、全て内的期待に含まれる結果となった。

次に因子ごとに平均評定値を算出し（Table 2）、一要因の分散分析を行った結果、平均評定値に有意な差があることが分かった ($F(2.62, 329.49) = 163.03, p < .01$)。Bonferroni 法による多重比較の結果

Table 1 大学進学動機尺度の因子分析結果

項目	因子負荷量			
	I	II	III	IV
I 内的期待 ($\alpha = .90$)				
人生の視野を広げるため	.80	.07	-.21	-.16
大学の設備が充実していたため	.79	-.18	.14	.16
幅広い教養を身につけるため	.78	-.03	.09	.08
文系と医系の連携である「文医融合」の学部に魅力を感じたため	.72	.03	-.04	-.12
地域に根差した教育方針に魅力を感じたため	.64	.09	-.06	.08
知的好奇心を満たすため	.62	.01	.14	.03
医学部があり、医学的な知識も学べるため	.62	.03	.00	-.01
学科専門の知識だけでなく、他学科の専門知識も学べるため	.61	.24	.03	.10
自分の才能を伸ばすため	.59	.24	.19	-.18
II 外的期待 ($\alpha = .85$)				
高卒では嫌だから	-.08	.71	.12	.13
大卒の肩書がほしいため	-.09	.70	.07	.17
高い社会的地位を得るため	.27	.68	-.15	-.05
就職後、より高い役職に就くため	.08	.67	.16	-.04
就職後、多くの収入・給与を得るため	.09	.59	-.06	-.13
社会に通用する肩書きが必要なため	.22	.56	-.06	.02
III 資格・専門性 ($\alpha = .77$)				
専門的な知識や技術を身につけるため	.05	-.08	.82	.06
興味のある分野を深く掘り下げるため	.28	-.14	.67	.16
資格をとるため	.05	.06	.67	-.02
進学しないと希望の職業の資格が取れないため	-.18	.35	.57	-.06
IV 無目的・漠然 ($\alpha = .76$)				
自分の成績にあっていたため	.16	-.12	.07	.74
自分の学力を考慮したため	-.07	-.01	.15	.69
入試の難易度を考慮したため	-.30	.32	.04	.58
他にやりたいことがないので	.19	.02	-.39	.49
特に目的はない	.01	.07	-.46	.46
因子間相関				
	I	II	III	IV
		.45	.38	.04
			.05	.40
				-.05

削除した項目：因子負荷量 .45以下、もしくは複数の因子で一定の負荷量がみられた時

- 自由な時間が欲しいため
- 自分に合った職業をさがすため
- 周りのみんなが行くものだから
- 親孝行のため
- 両親が勧めるため
- 就職に有利なため
- 同じような目的を持った友人を得るため
- 得意とすることを追求するため
- 青春をエンジョイするため

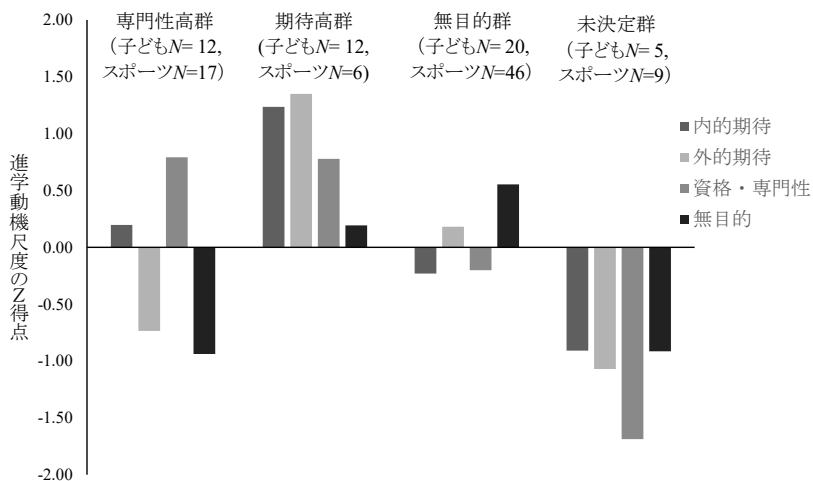
果、専門性の得点が4.26点と最も高く、次いで内的期待、次いで外的期待、そして最も低いのは無目的という結果になった。

大学進学動機によるクラスター分析

神谷 (2010) と松田ほか (2014) を参照し、大学進学動機による類型化を行った。大学進学動機の4下位尺度をz得点に換算し、Ward法によるクラスター分析を行った。その結果、クラスター間の特徴が大学進学動機により異なっており、なおかつクラスターに含まれる人数に偏りが少ない4クラスターが妥当であると判断した (Figure 1)。まず、第1クラスター ($N = 29$) は、他の群と比較して「資格・専門性」が高い特徴があり専門的な知識獲得や興味関心の追求に関する項目の得点が高いことから専門性高群と命名した。第2クラスター ($N = 18$) は、「内的期待」と「外的期待」が高い傾向があり、身に着けたい学問や大学に行くことの社会的価値に対する期待が高いことから期待

Table2 各学科の下位尺度得点の平均値と標準偏差
(総合子ども学科 $N = 49$, スポーツ医科学科 $N = 78$)

		Mean	SD
内的期待	子ども	3.59	1.00
	スポーツ	3.41	.72
	総和	3.48	.84
外的期待	子ども	2.98	.90
	スポーツ	2.85	.89
	総和	2.90	.90
資格・専門性	子ども	4.35	.66
	スポーツ	4.20	.61
	総和	4.26	.63
無目的	子ども	2.51	.73
	スポーツ	2.45	.81
	総和	2.47	.78



子どもN・・・総合子ども学科の人数, スポーツN・・・スポーツ医科学科の人数

Figure 1 学部全体のクラスターの特徴

高群と命名した。第3クラスター ($N=66$) は、「無目的・漠然」が高い特徴があるため、無目的群と命名した。第4クラスター ($N=14$) は、いずれの因子も得点が低い傾向にあった。よって、何か専門性や学業に対する期待が明確にあるわけでもなく、何も目的がなく進学したわけではないが、ただ明確に将来に対する展望が持てていない群と解釈し、目的や期待が未決定という意味を含む未決定群と命名した。

また学科ごとの内訳は、両学科ともに無目的群の割合が多く（総合子ども学科41%、スポーツ医科学科59%）、特にスポーツ医科学科の学生の半数以上は無目的群に属する結果となった。さらに、総合子ども学科は専門性高群と期待高群を合わせると約半数がどちらかの群に属するが、スポーツ医科学科は専門性高群が22%、期待高群が8%となり総合子ども学科よりも少ない割合となった。

考 察

大学進学動機尺度について

本研究では、久留米大学人間健康学部に入學してきた学部1年生の大学進学動機を明らかにすることであった。本研究で用いた大学進学動機尺度は、「進路決定方略」（栗山ほか、2001）や「進学動機」（松田ほか、2014）、「大学への入学動機」（中村・薊、2016）に関する調査において開発された調査項目に加え、「本学の独自性」に関する項目を含んだ。その結果、先行研究の項目を完全に踏襲した因子構造は見られなかったが、本研究で「内的期待」として抽出された第1因子は、栗山ほか（2001）で「エンジョイ」や「得意分野」の因子として抽出された項目、松田ほか（2014）で「自己形成」の因子として抽出された項目が該当した。また本研究で追加した、「本学の独自性」に関する項目（例「大学の設備が充実していたため」「文系と医系の連携である「文医融合」の学部の魅力を感じたため」等）に関する項目も「内的期待」の因子に含まれた。この項目のみ独立して「本学の独自性」にまとめられなかったのは、「本学の独自性」として加えた項目に対して他大学と比較してこの独自性に魅力を感じて久留米大学に進学したというよりも、純粋に、設備の恵まれた大学、医学的な知識も学べるということに意義を感じて進学してきたため、他の内的期待の項目と同様にこの因子に含まれたとも考えられる。

次に、本研究で「外的期待」と命名した第2因子は、栗山ほか（2001）や松田ほか（2014）の「社会的地位」因子にある項目とも重なる結果となった。なお、本研究で「社会的地位」と命名しなかったのは、大学入学によって副次的に得ることができる外的動機に関わる意味も含めて命名したからであった。

さらに第3因子では「資格・専門性」の因子が抽出されたが、先行研究の「資格・専門」因子（栗山ら、2001）や学問的探究の項目（中村・薊、2016）を含んだ因子となった。本研究では学生自身の興味関心・学業に関わる内容の項目が「内的期待」と「資格・専門性」に分かれた結果となったが、両学科とも資格取得が目的の一つである特性があるため、「資格・専門性」が「内的期待」とも独立して因子として抽出されたと考えられる。

そして第4因子の「無目的・漠然」については、中村・薊（2016）において、「偏差値との適合」と「消極的選択」に該当した項目が含まれていた。大学の進学先について、「無目的・漠然」に関わる因子は、自分の成績から合格可能性を考慮して大学を選択するというモデルが示されていることから（栗山ほか、2001）、先行研究の因子と重なりと言える。

大学進学動機尺度の下位尺度得点を比較したところ、「資格・専門性」が最も高く、次いで「内的期待」という結果になった。特に「資格・専門性」に関しては5点満点中4.26点と高得点であり、資格取得や専門的知識を学ぶことへの意識が高い学生が多いことが伺える。これは両学科とも取得できる資格が明確であるため、予測した通りの結果となった。またそれに加えて「内的期待」が3.48点と次いで高く、資格取得に加えて学生自身の人生の視野を広げたり、文医融合といった大学の独自性に対する関心について知識や技能を深めることを目的に進学してきた学生が多いことも示された。これらは学生の興味に関わることであるが、興味は個人と環境との相互作用によって生じる現象であると仮定されていることから（湯・外山，2016）、大学生活を過ごす中で学生の興味関心がどのように変化していくのかを追跡する必要がある。

大学進学動機についてのクラスター分析について

大学進学動機についてクラスター分析を行ったところ、大きく4つの群に整理された。神谷（2010）では、「積極進学群」「社会的価値群」「消極進学群」「自己興味群」に、松田ほか（2014）は「社会的地位群」「漠然群」「自己形成群」「無動機群」の4つにいずれも分類されていた。いずれも大学進学動機に関する項目は含まれているが全く同じ項目を使用していないため単純に比較はできないが、「積極進学群」「自己形成群」は本研究の「専門性高群」や「期待高群」における内的期待や資格・専門性のz得点が高い点と重なる。また松田ほか（2014）で「漠然群」と命名されたクラスターと本研究の「無目的群」は、「無目的・漠然」のz得点が高い点で類似し、松田ほか（2014）で「無動機群」と命名されたクラスターと本研究の「未決定群」は全てにおいてz得点が低い点で類似した特徴を持っていた。一方で、先行研究にある「社会的価値群」や「社会的地位群」といった群のようにキャリアや就職後の経済的価値に関連する項目が他の項目より際立って高いクラスターが本研究では見られなかった。「期待高群」は外的期待のz得点が高いが内的期待のz得点も同程度に高く、専門性やカリキュラム内容への興味に付随する形で大学卒業という肩書や就職後の地位や経済面についても期待している学生の方が多いのではないかと考えられる。

またクラスターの人数比を見ると、無目的群の人数が半数以上いることが分かる。下位尺度得点では「無目的・漠然」の平均値は最も低かったが、学生個人で見ると明確な大学進学動機がない「無目的」の学生も多く存在することが分かる。

さらに学科別の人数の内訳を見ると、スポーツ医科学科は「無目的群」が半数以上いる結果となった。これは卒業後の進路について、スポーツ医科学科の方が総合子ども学科よりも自由度が高く、資格を取得した後どのようにその資格を生かしていくかという将来の選択肢が多いことも関連している可能性がある。体育大学生を対象とした研究（本多ほか，2013）においても、得点は低い「無目的」の因子と関連する因子が存在し、進級しても一定数目的が定まらない者がいることが示されており、これらは共通する特徴であると考えられる。

総合子ども学科は約半数が専門性高群と期待高群にいる結果となったが、41%は無目的群になっていることを鑑みると無目的群にいる学生が少ないわけではない。これら両学科1年生の特徴を考えると専攻領域に関わらず、進路決定の仕方も関連があると考えられる。どこの大学へ進学するかを決定するまでには高等学校での進路指導があるが、多くの場合は受験指導という形で行われており、進路決定における成績要因の占める割合が大きいという学校教育の特性（下山，1983）が、大学入学後に明確な大学進学動機が定まっていないことに関連している可能性もある。

まとめ

以上のように、大学進学動機の因子について4つの下位尺度の存在を示し、クラスター分析を用いて学生の特徴についても吟味してきた。本研究の成果として、第1に、学部が提示している「独自性」に関しては、学生の大学進学動機の中のひとつの事柄として「内的期待」に含まれていることが明らかになった。第2に、資格取得ができることや専門性が明確である学部に入学者の大学進学動機は、資格取得に関わる内容に加えて、それに関わる学生個人の興味関心も大学進学動機のひとつであることが示された。第3に、学生個人の特性をみると学部学科の中でも意識の違いがあり、明確に資格取得や専門的知識の獲得を目指している者もいれば、個人のキャリアについて未決定であり、明確な大学進学動機がない者も存在することが分かってきた。

キャリア発達の視点から大学生時代の発達課題を考えると、学校から社会への移行という課題を達成していけるよう学生自身が自己確立し(江戸川, 2017)、自己確立のための猶予期間としてのモラトリアムを抜け出す必要がある(下山, 1996)。よって自己確立を促すために、大学教員の学生に対する働きかけについて考えていく必要があることはもちろんのこと、各専攻におけるカリキュラム内容について学生の好奇心を刺激したり、進路選択に余地を与えるたりするような工夫も必要になってくる。

今後は、学生生活の中でどのように進路決定していくのか、また大学進学動機に含まれていた項目の内容について学年が上がるごとにどのようにそれらの追求が達成されていくのかについて追跡調査をしていく必要がある。

さらに、本研究で学部が提示する「独自性」に関して、今回使用した項目では「内的期待」にまとまる形になったが、他に独自性はないか学生に聞き取り調査をするなどして、独立した因子になる可能性も含めて項目を検討していく必要もあると考えられる。

注

1. 大学進学動機は、入学動機や大学進学志望動機など、別の言葉で使用されている論文もあるが、本論文ではすべて大学進学動機とする。

文献

- 江戸川良枝(2017) 大学生における初年次のキャリア教育：大学生の発達課題とアイデンティティ形成に着目して。名古屋学院大学論集 社会科学編, 53 (4): 231-244.
- 淵上克義(1984) 進学志望の意思決定過程に関する研究。教育心理学研究, 32 (1): 59-63.
- 古市裕一(1993) 大学生の大学進学動機と価値意識。進路指導研究, 14: 1-7.
- 後藤宗理(2003) 大学生における進学動機・自己意識・社会意識：専攻分野の比較。名古屋市立大学人文社会学部研究紀要, 15: 1-18.
- 半澤礼之(2013) 大学生の進学動機と学業に対するリアリティショック。北海道教育大学紀要(教育科学編), 64 (2): 233-240.
- 本多美美子・方住月・金高宏文・竹下俊一(2013) 鹿屋体育大学生における大学進学動機と大学在学理由の検討：性、学生、専攻課程による比較。学術研究紀要, 47: 29-37.
- 神谷哲司(2010) 保育系短期大学生の進学理由による保育者効力感の縦断的变化。保育学研究, 48 (2): 86-95.

- 栗山直子・上市秀雄・齊藤貴浩・楠見孝 (2001) 大学進学における進路決定方略を支える多重制約充足と類推. 教育心理学研究, 49: 409-416.
- 松田侑子・濱田祥子・設楽紗英子 (2014) 保育系学生における大学適応: 進学動機, キャリアの観点から. 弘前大学教育学部紀要, 112: 81-88.
- 文部科学省 (2017) 平成29年度学校基本調査 (確定値) の公表について. http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afiedfile/2018/02/05/1388639_1.pdf (参照日2019年1月31日).
- 中村 真・薊 理津子 (2016) 大学適応に影響する要因としての入学動機に関する基礎的検討. 江戸川大学紀要, 27: 301-308.
- 下山晴彦 (1983) 高校生の人格発達状況と進路決定との関連性についての一研究. 教育心理学研究, 31 (2): 56-61.
- 下山晴彦 (1996) スチューデント・アパシー研究の展望. 教育心理学研究, 44 (3): 350-363.
- 湯 立・外山美樹 (2016) 大学生における専攻している分野への興味の変化様態: 大学生用学習分野への興味尺度を作成して. 教育心理学研究, 64 (2): 212-227.
- 八木晶子・齊藤貴浩・牟田博光 (2000) 高校生の大学進学志望動機と進学情報の有用度との関連に関する分析. 進路指導研究, 20 (1): 1-8.
- 渡辺三枝子 (2009) キャリアデザイン時代: 大学生のキャリア, 何故いま支援が必要か. 日本私立大学協会 教育芸術オンライン 第2377号. <https://www.shidaikyo.or.jp/newspaper/rensai/daikai-1/2377-3.html> (参照日2018年3月11日).

附 記

本研究は、久留米大学人間健康学部における中央研究費の助成を受けて実施されました。研究にご協力いただいた学生の皆様には感謝申し上げます。

(2019.4.11. 受理)